

東京都西多摩郡奥多摩町「速滝ノ岩屋」測量報告

Survey Report of the Wild Cave “Hayataki no Iwaya Cave” in Okutama-machi, Tokyo

村野哲雄 (Tetsuo MURANO)
地底旅団 ROVER 元老院所属 東京都在住

1. はじめに

我が国の民俗学の祖といわれる柳田國男の処女出版「後狩詞記」の序文に、東京都西多摩郡奥多摩町の峰集落（現在は廃村）のことが記されている。これは、1899(明治32)年、当時25歳で東京帝国大学の2年生だった柳田國男が夏休みに峰集落に2泊し、当時の古里村長で「峰の大尽」といわれた福島文長から狩りの話を聞いたというものである。

本書には、次のような記載がある。「此家〔著者注：福島文長宅〕の縁に腰を掛けて狩の話聞いた。小丹波川の源頭の二丈ばかり瀧が家の左に見えた。あの瀧の上の巖には大きな穴がある。其穴の口で此の熊(今は敷皮となつて居る)を撃つたときに。〔原文ママ〕手袋の上から二所爪を立てられて此傷を受けた」と。ここで語られている「大きな穴」とは、「瀧の上の巖」にあるということから、峰集落の麓を流れる入川(後狩詞記でいう小丹波川。国土地理院の地形図では峰入川谷と記載されている)の源流部に懸かる速滝近傍に開口する「速滝ノ岩屋」を指していると考えられる。

「速滝ノ岩屋」は古くから知られた洞窟で、明治初期の官撰地誌編纂事業「皇國地誌」の一環として、青梅出身の歴史家・齋藤眞指により編纂された「皇國地誌・西多摩郡村誌」の1879(明治12)年5月の調査草稿「棚澤村誌」のうち、「速瀧」の項に「岩下に一つの洞穴アリ。洞口ハ九尺餘リニシテ、洞中ハ方二間程ナリ」と紹介されている。また、宮内敏雄著「奥多摩」には、洞口の大きな位置と規模が記載されており、「速瀧の瀧壺から左に曲り、夥しい山葵田の柳釜ノ澤を僅か廻り、すぐ右を採つてトレエルを岩屑のガラ澤に求めると、右手に速瀧ノ岩窟と呼ばれる奥深い聖石の洞窟を見る。10人位は優に雨露を凌げるものである」とある。

「速滝ノ岩屋」の測量図は、角田清美氏らにより作成されているが、簡易な平面図と洞口スケッチのみで、洞口プロットならびに縦断面図の作成などは行われていない。そこで今回、「速滝ノ岩屋」の洞口位置確認および再測量調査を行ったので報告する。

2. 洞窟データ

洞窟名 速滝ノ岩屋 (Hayataki no Iwaya)
所在地 東京都西多摩郡奥多摩町棚澤 入川柳ガマ沢左岸
北緯 35 度 50 分 22.77 秒
東経 139 度 07 分 01.21 秒
洞口標高 733m
洞口数 1
測線延長 6.8m
高低差 1.3m
水流 なし

3. 洞窟名称由来

本洞窟がいつ頃から「速滝ノ岩屋」と呼ばれるようになったのかは不明であるが、先述の宮内著「奥多摩」の記載から、遅くとも本書が発行された1944(昭和19)年にはそのような名称となっていたと思われる。もともと本洞窟に固有の名称はなく、地元猟師や炭焼き職人の間で単に「いわや(岩屋、岩窟)」と呼ばれていたものを、所在地を明確にする目的で頭に「速滝ノ」を付すようになったのであろう。

4. 洞口周辺記載

JR 青梅線鳩ノ巣駅の南西、国道411号線(青梅街道)の西川にかかる鳩之巣橋東側を北方向に分岐する道に入り、青梅線鳩の巣拱橋をくぐって西川の左岸沿いに進むとそのまま林道西川線に入る。林道は、大根ノ山ノ神を経由して峰集落跡地に到達する。鳩之巣橋からここまでおよそ4.5kmである。林道をさらに約500m進むと終点となる(2024年8月12日現在)。林道終点から平坦な山仕事道が延びており、30分ほど進むと右に姥岩沢方向へ下る踏み跡が分岐する(速滝ノ岩屋周辺地形図のA地点)。姥岩沢を渡り、しばらく進むと踏み跡は不明瞭となるが、入川に向かって斜面を下っていくと銚子



速滝ノ岩屋周辺地形図(国土地理院地図電子国土Webに加筆)